松江の文化の魅力について

佐野史郎

2006 年より松江市からのご依頼をいただき、小泉八雲の朗読を継続して開催させて頂いております。

2007 年からは、上演スタイルを定め、小泉八雲の曾孫であり民俗学者の小泉凡さん監修の下、「小泉八雲 朗読のしらべ」として、小泉凡さんの講演、そして松江南高校の級友でもあるギタリストの山本恭司と共に、音楽と語りというスタイルで上演を続けさせて頂いております。

仕様ばかりはマイクにエレキギターというバンドサウンドではありますが、義太夫にも通じる古典芸能の形態と、その魂は変わらずにありたいとの想いも抱いております。

自分たちでは、そのことを当初は意識しておりませんでしたが、古き伝統を守りながら、躊躇することなく新しいものを積極的に取り入れる…。

それこそ、松江人の特徴ではないかと思っています。

小泉八雲という欧米人を、教師として迎え、欧米の知識、感覚をいち早く学ぼうとした姿勢もそのひとつだったのかもしれません。

そうして近代西洋文明を取り入れようとしながらも、欧米の歴史の背景にもある、出雲の地と通じるアニミズム～万物に魂が宿る精神の共通性をヘルン先生が説いたことで、洋の東西を問わぬ、差別せぬ精神の大切さが、松江の人々の心に共鳴し、その想いが最も大切なのだと、今に受け継がれてきているのでしょう。

ラフカディオ・ハーンのサインをカタカナで「ヘルン」と記したことで「ヘルンさん」として松江で親しまれるようになり、その後、小泉八雲として帰化したヘルンさん。

対立ではなく融和の尊さを、今もヘルンさんから教わります。

小泉八雲が綴った「神々の国の首都」に登場する、ゆかりの地をガイドブックとして、世界中の方々に楽しんでいただけるようなルートを案内することは、これまでにも行っていらっしゃるとは思いますが、『知られぬ日本の思い出』に登場する、出雲大社や加賀潜戸、鳥取の八橋などにもアクセスできるようなルートを松江滞在を軸として、わかりやすく提示していただけたらと思います。

八雲は山陽から人力車で中国山地を越え、上市（大山町）で感銘を受けた盆踊り、

「いさい踊り」を観、水路で大橋川から松江へ入ったと云いますが、大山町、境港の水木しげるロード、『稲生物怪録』で知られる奥出雲と隣接する広島の三次町など、妖怪、怪談、神々の地をネットワークする拠点として松江をアピールすることができれば、出雲、伯耆、吉備、安芸…山陰、中国地方全体に漂う神秘的な魅力と、たたらを始めとする最先端テクノロジー発祥の地、外来のものと土着のものを融合させる平和の象徴の地として、古きものと新しきものが共に共存する魅力を体感していただけるのではないかと思います。

俳優仲間、特に女優さんや女性スタッフから、「出雲を旅行したいのだけど、どこがオススメですか？」と質問されることが少なくないので、スピリチュアルな聖地はぜひ、ご紹介したいところです。
今井書店さん発行の「松江余談」の新装改訂版も松江の歴史を体感するのに手軽な一冊かと思いますし、「知られぬ日本の面影」と共に、松江歩きのガイドブックとして活用できると良いと思います。

小泉八雲により掘り起こされた日本の、松江の文化的資産は、その後の近代文学出発点の地のひとつと言っても良いでしょう。
夏目漱石が小泉八雲に触発され「夢十夜」を記したのはあきらかでしょうし、島崎藤村、志賀直哉など、多くの文士たちが、小泉八雲詣のようにして松江を訪れています。
松江観光協会さんが出された「松江・文学の旅」の続巻も望まれるところです。
また、松江出身の偉大な詩人、「キラキラヒカル」で知られる入澤康夫さんが、もっと広く知られても良いのではないかと思います。
現代詩を読む人は限られているかもしれませんが、最近は最果タヒさんの登場で、現代詩にも興味を持つ若い世代の方もいるようです。
入澤さんの「わが出雲・わが鎮魂」「かりのそらね」など、出雲地方への愛情の深さと、暗黒の歴史に正面から向かい合う姿勢もまた、出雲の地の果たさねばならぬ大切なこととも思います。
アニメ「文豪ストレイドッグス」で、これまでとっつき難かった文学の世界が、アニメキャラクターとして親しまれるようにもなり、どこでどう、知られざるキャラクターに注目が集まるか分からないのも、この世界かと思います。
「鷹の爪」のフロッグマンさんの小泉八雲の怪談アニメなどでも、すでに親しまれ

てはいるでしょうけれど。
　個人的には、いつか入澤康夫さんの詩を朗読する機会があればと、心に秘めております。

　目に見えぬ神々の国の魂の一方で、見応えのある建造物や鉄道なども外せません。
　一畑電鉄は外せないでしょうし、山陰本線の鉄道の旅の楽しさも味わって頂きたいものです。
　豪華列車もあるようですが、水路の時代の航路を、今一度辿るような旅を望む方もいらっしゃるのではないでしょうか？
　そして、鉄道とともに近代文明を語る上で外せないのが写真文化。
　幕末にいち早く松江藩から長崎に写真技術の習得を命じられ、藩士が派遣されました。
　その技術が、明治となった後に、松江、山陰各地で写真館開業の後押しとなったと云います。
　その歴史を辿る作品は、島根県立美術館に多く収蔵されており、写真文化の根付いた土地として、松江を中心に、それら優れた山陰の写真家たちゆかりの地にアクセスできれば、そこは、もしかしたら神話ゆかりの地と重なるかもしれません。
　鳥取、赤碕の塩谷定好、境港の植田正治、共に写真記念館がありますし、松江の写真も数多く残しています。
　資生堂の二代目社長、福原信三も写真を広めた人物として重要な存在かと思います。写真集「松江叙景」を通して、資生堂のシンボルマーク“椿”が八重垣神社の椿、稲田姫が鏡として写した池より、美の象徴として取り入れられていることも、全世界にアピールしたいものの一つです。
　「松江風景」の復刊は、個人的にも、ぜひ、お願いしたいところです。現在の風景との対比など、興味は尽きません。
　このように、写真の聖地、美容の聖地となる要素も数多くあると思います。何より、美肌日本一の地域ですし。

　松平不昧公により、松江に根ざしたお茶と和菓子の文化は、松江の人にとっては当たり前かもしれませんが、金沢など、いくつかの小都市に限られているようにも思われます。

利休の教えは、様々な形で、武士の嗜みとして全国各地に伝わりましたが、庶民にまで広がり、根ざした街はそうはないと思います。
お茶とお菓子の街として、さらに親しんでいただけたらとも思います。

茶席といえば、懐石料理ですが、食の文化も伝えていきたいものの一つです。宍道湖七珍を筆頭として出雲地方には美味しいものが数多くあります。列挙すればキリがないほどでしょうけれど、個人的には、東京橋（ひがしきょうはし）を渡ったところにあった天丼屋さん「天要」の味が忘れられません。白魚のかき揚げ天丼で知られた店でしたが、昭和 45 年に閉店。戦時中に松江に疎開していた、日本マクドナルド初代会長の藤田田（でん）さんが、その美味しさを絶賛し、ファストフードチェーン店、日本マクドナルドを展開しようとした時、同時に天丼屋さんのチェーン店も展開しようと云います。それが、当時のお仲間だった方の手により、現在の「てんや」さんに受け継がれたそうです。
敷居の高いものではなく、庶民にとって大切な松江の味が、現在の日本のファストフードの原点となっているというのも、広く知っていただきたいことの一つです。
「天要」の建物は、幸いなことに現在も、外観はそのままに残っています。
松尾骨董店さんが管理なさっているようですが、 江戸時代の松江の洒脱さを残す界隈に、当時の味を再現し、多くの方に味わっていただけたらと願っています。
白魚のかき揚げ天丼で知られていたとはいえ、モロゲ海老など、季節季節の地元の食材を活かして提供していたようですので、例えば、「魚一」さんや「やまいち」さんにご協力いただくなどの方法もあるのではないかと、夢見ています。
「天要」の並びの名和理髪店さんに以前取材し、素材、レシピ、調理方法など、詳しくお伺いしたこともありました。
いつか、松江の天丼屋さんの映画を作るのが夢でもあります。
個人的な想いで申し訳ありませんが、参考にしていただけたらありがたく存じます。
藤田田さんのみならず、戦後も山下清や数多くの俳優、音楽家たちも松江に訪れると「天要」に寄ったと言います。もちろん、郷土の方々は言うに及ばず。植田正治さんの「天要」のことを綴ったエッセイも素晴らしかったです。
荒木秀之著「松江食べ物語」（山陰中央新報）などにも掲載されてきた「天要」、漢

東種一郎さんの文章、福田茂宏さんの絵による「松江／わが町」（今井書店）の「天要」の表現も素晴らしかったです。
こうした書籍も、今でしたら、松江観光案内アプリとリンクして活用できるのではないでしょうか？

最後に、なんと言っても松江は、小泉八雲が記したように「神々の国の首都」であります。
出雲の地は、国譲りの神話に象徴されるように、古代には九州は高良、筑紫、豊の国、天孫降臨の日向、そして飛鳥、大和と並ぶ強大な出雲国でありました。
特に、島根半島東は神戸郡、西は意宇の国が栄え、奥出雲に連なる松江は、意宇の国の中心地。
古墳群、荒神谷遺跡など、体感する古代も数多くあります。
熊野大社、神魂神社、八重垣神社は言うまでもなく、観光スポット、縁結びのパワースポットとして近年はかなり知られるようになりました。

大化改新、戦国時代、明治維新、太平洋戦争、この国の政治状態がどんなにかわろうとも、出雲の地、松江の風景や人々の優しさが変わらずにあるのは、置かれている状態に抗うのではなく、和を持って制する土地柄だからだと思います。
もちろん、時には、本当に戦わなければならないこともあります。そして、その時には戦い、たとえ、屈せざるを得ないことがあっても、この土地の歴史を振り返り、譲り続ける精神の中にこそ、本当に大切なものを失わない術があることを教えてくれるのだと思います。
幕末の隠岐騒動、太平洋戦争終戦直後の松江騒擾事件、松江出身の栗原安秀中尉も参加した 226 事件など、松江の負の歴史とされるものも少なくありませんが、近現代を数千年後から観た古代と見れば、クーデターを起こした人間が、果たして本当に悪者として扱われるべき人物たちだったかどうかは、出雲神話からも学ぶことができるのではないでしょうか？実は彼らこそが、現在進行形の「古事記」「出雲国風土記」に記される神々なのではないでしょうか？
「因幡の白兎」のオオクニヌシではありませんが、弱き者の魂を救う街として、あえて封じ込められた歴史と向かい合う勇気を持つことも、長い目で見れば、大切なことかもしれません。

松江～意宇のクニの由来は、「出雲国風土記」の国引き神話で八束水臣津野命が国引きを終えた時の掛け声「おゑ」が由来とも言いますが、“宇宙を意に収める”の意味とも取れそうです。
この地を、天を、空間を、思うがままに手に入れた出雲の祖神は、穏やかな出雲人の印象とは裏腹に、豪胆な一面も見え隠れします。

上海北部、中国の松江府に似ているので命名されたともいう「松江」ですが、大国の名に由来したその奥底には、想いを遂げる力強さを秘めた「意宇」の土地の底知れぬ力が隠されているのでしょう。
松江各地に残る、古代よりの聖地に建立された神社の数々を、単なる縁結びスポットに留めることなく、「意宇」の元に、争いのない平和の聖地として広く知っていただければと思います。